

自主シンポジウム 32

中学校臨床を考える

—— 問題行動に焦点をあてて ——

企画者 中山俊昭 (けやき台中学校)・角田 豊 (甲子園大学)
 司会者 角田 豊 (甲子園大学)
 話題提供 中山俊昭 (けやき台中学校)・戸田玲子 (ゆりのき台中学校)
 伊藤美奈子 (お茶の水女子大学)

(企画趣旨)

スクールカウンセラーが各校に配置され、各校種の児童生徒の発達にみあった方法でカウンセリング活動を行っている。しかし、各校種間の違い(例えば、中学校は学年意識が強く、極端な言い方をすれば各学年が一つの学校であると言っても過言ではない。)を意識したカウンセリング論は、まだ十分討議されているとは言えない。

そこで、今回は、発達的に最も揺れの大きい思春期まっただ中の中学生を対象に、学校組織的に学年単位が強い中学校の学校臨床のあり方について討議する。

特に、非行臨床に関しては、スクールカウンセラーと学校側とで双方の考え方の違いでしっくりいかないものを感じる場合も多い。従って、学校教育相談活動における非行臨床のHERE AND NOWについても中学校教師とスクールカウンセラーが各々の立場でのニーズや問題点を討議しあいたい。

尚、カウンセラー側と教師側の本音も交えた学校臨床論の討論等は余りみあたらない。学校臨床を行うカウンセラー側と教師側(これとても一部の教師の意見にはなるが)が本音の対話を行い今後の中学校臨床のよりよいあり方の一つを討議、模索するために本シンポジウムを企画した。フロアーの方々の忌憚のないご意見を大いに期待したい。

尚、話題提供者と司会は次の通りである。

- ①中山俊昭 : 生徒指導主事と教師カウンセラーを兼ねている者として、スクールカウンセラーの非行臨床への活用ニーズと本校事例を報告する。
- ②戸田玲子 : 中学校のスクールカウンセラーの立場で相談内容の教師へのフィードバックの実際や非行相談の場合の実際について報告する。
- ③伊藤美奈子 : 研究者としての立場とスクールカウンセラーの立場で、学校臨床について語って頂く予定である。
- ④角田豊 : 以上の話題提供を受けて、研究者、スクールカウンセラー、スクールアドバイザーの視点を持ちつつ司会を担当する。

尚、以下の文章は企画者の中山が学校の立場を、角田がカウンセラーの立場で問題意識を提示する。

非行臨床とスクールカウンセラーに関して

中山 俊昭

筆者は中学校の生徒指導主事をしている。同時に教育相談も担当し、学校心理士でもある。

本校にもスクールカウンセラーが3年前から配置され、その活用事業で、不登校生徒や不登校生徒の保護者にはカウンセリングサービスを提供することができ再登校できた生徒もおり、成果もみられた。

しかし、非行等の問題行動に関しては、学校側はカウンセラーを活用しているとはいえない。これは本校だけではない。生徒指導主事の担当者会の情報交換でも、ほとんどの学校がスクールカウンセラーは不登校生のみに関わってもらっているとのことであった。

では、なぜあまり活用しようとしていないのか。この点に関して、筆者は学校現場の教師とスクールカウンセラーの問題行動に関する時間的ズレが大きいと感じている。

日々生徒と顔を合わせ、変化の様子をリアルタイムで感じている教師と毎日学校に来ていないスクールカウンセラーとでは、問題行動に対する見立てや意味づけはおのずと違ってくる。

スクールカウンセラーは学校で日々起きている様々な事象はわかりづらい立場にある分、客観的な視点でその学校の事象をみることができる。これはよさでもあるが同時に弱点でもある。

日々、逸脱行動に悩まされている教師がカウンセラーに相談したとき「生徒の表現が言葉でなく問題行動をとることによってしか表現できていないからですよ」といわれたら、参考になったと思う教師もいるが現実には失望している者が多いだろう。

今まさに、具体的にその逸脱行動をとめる方法を知りたいと教師は思っているのである。しかし、筆者はこの教師とは違う視点で生徒を見る視点こそ非行臨床にとって特に重要と思っている。

カウンセラーの活躍度は受け入れる学校の教員の意識に大きく左右される。今の現状をどのようにしたいのか、相互に対話することが重要である。

参考文献：中山俊昭「スクールカウンセラーのいる学校」『月刊生徒指導』2000年4～10号、学事出版

カウンセラーから見た問題行動に対する教師の対応

角田 豊

筆者は、これまで7年あまり、スクールカウンセラー（SCと略）や単発的な学校訪問形式のスクールアドバイザー等として、学校現場との関わりを持ってきた。また、小・中・高校の教師や養護教諭らとの研究会・研究活動を行っている。こうした経験の中から、①カウンセラーと教師の仕事の共通性、②学校がSC等をいかに使うか、③教師の教育観への問いかけ、の3点から、生徒の問題行動に対する教師の対応について、述べてみたい。

①カウンセラーと教師の仕事の共通性

筆者は、これまでに多くの教師に出会う機会を持ち、その中で、教師が児童・生徒に対してどのように関わったかについて聞く機会を持った。例えば、一人の教師からの相談の場合もあれば、教職員全体の事例検討会の場合もある。その実際としては、問題行動を大まかに反社会行動と非社会行動に分けた場合、不登校などの非社会行動のケースが多くなる。小学校では、学級崩壊に至らないまでも、反抗的な態度や対児童暴力などもあるが、これまで筆者が経験した多くは不登校に関するものであった。これはカウンセラーが相談に来るクライアントを対象に関わるという形態をとることに起因しており、即

応的な対処を必要とする非行などの反社会的な問題行動の場合には、カウンセラーが教師にとって使いにくいことがあげられる。

不登校生徒やその家庭に関わる場合、その変化は、学校に来たか来ないかといった点でしか表に現れにくい、実際は、例え一年間不登校状態が続いたとしても、教師との関係の中で、一人の生徒の内面は大きく成長する場合もある。しかし、その変化は周囲からは見えにくく、関わっている教師自身も何をしているのかに自信がもてなくなることも多い。こうした場合に、筆者は、カウンセリングと形態は異なるが、それと同質の人間関係のあり方を見だし、教師の対応や生徒の変化について明細化して返すことができる。これは教師へのスーパービジョンということができる。その機能は、教師の行っている関わりの意味づけをすることにあり、教師自らが自分と生徒について、これまでを振り返り再確認を行える点に意義がある。しかし、当然のことながら、SCの側に、見立てと臨床的人格発達理論があり、また、自身のカウンセリング経験の裏付けがなければ、有効なスーパービジョンは行えないといえる。

②学校がSC等をいかに使うか

SCや心の教育相談員、あるいはハートケア・サポーターなど、外部からカウンセリングに関連する人員を学校に配置しても、それを有効利用しなければ、学校にとって何のメリットもない。端的に言えば、学校の負担が増えるだけ

で、いわゆる「お荷物」と化する。これではSC・学校双方にとって不幸である。当然のことながら、ここには二つの要因がある。ひとつは、学校側のSC活用への姿勢であり、もうひとつは、SC側の学校現場に対する姿勢である。まず、一口に学校と言っても、要は一人ひとりの教員の問題ともなる。校長や教頭といった管理職がどのようにSCを活用しようとするのか、校務分掌上の各主任クラスはがどうか、各担任は、養護教諭は、等があつて、それらの総合として、その学校の雰囲気形成される。他方、SCなど外部から入る人間は、学校現場ならびに学校教師への理解をどの程度持っているかが、重要である。単に、これまで大学の相談室、病院、教育研究所などで行っていたカウンセリングを学校に当てはめる、というだけの発想では、学校との間で齟齬をきたす。カウンセリングの「基本」はしっかりと身につけながらも、新たな場としての学校現場への「応用」が求められる。

③教師の教育観への問いかけ

筆者はSC側の人間であり、学校教師ではない。したがって、部外者の立場からの見解であるが、次に述べることは個々の学校教師への問いかけとして、ご理解いただきたい。すなわち、教師は児童・生徒に対して、どのような「教育観」を持っているのか。具体的には、教師として子どもにどのように育ってほしいのか、どのような大人・人間を期待するのか。そうした根本的な姿勢がなければ、教育するということは不可能である。表面的なきれい事を並べられては、困るのである。自分が出会っている、一人の生徒に対して、あるいはその保護者に対して、自分は何をしようとしているのか。表に出ている「問題」をとりあえず、押さえないのか、消したい、関わりになりたくないのか。これらは、きれい事の背景に隠れている「本音」かもしれない。良いこと、正しいことばかりに目を向け、そればかりを求められても、人間は神様ではないのである。実際のところは、いくらきれい事を求めたり、言ったとしても、個々の教師自身の生き方そのものが、人間関係には大きく反映されるのである。全ての教師が、きれい事を並べているとは、もちろん思っていない。それは①にも述べたとおりである。

参考文献：拙著「カウンセラーから見た教師の仕事・学校の機能」1999,培風館。